

37 初代山脇道作とその門人達の伝記 に関する新資料

八 木 淳 夫

三重県亀山市は江戸時代、東海道五十三次の宿駅の一つとして栄え、譜代大名の石川氏が統治した土地柄である。

市内天神町の前田家は亀山藩士の家系で、代々藩校「明倫舎」の漢学教授を歴任したが、仕官する前は京都の儒医であった。特にその遠祖、法橋前田道通好成(一六二七～一六八二)は李朱医学後世派の医家、養寿院法印山脇道作玄心(はるなか。一五九四～一六七八)の門人であった。現在、前田家には道通の遺稿『草洞集』が伝えられているが、この中に「養寿院道作法印行状」及び「養寿院弟子小伝」が含まれている。

前者は山脇玄心の伝記で、玄心の易簣より二ヶ月後の延宝六年十二月七日に書かれた。実の処、本行状は玄心

の墓誌の撰文を木下順庵に依頼するために作成されたもので、直接公表されることのない原資料である。従って、先師のより真の姿を伝える資料として貴重であり、今まで知られることの無かった興味ある伝記事実が含まれているのである。即ち、

- ① 性格・容貌・趣味に関するもの。
- ② 決断力が衆に優れていたこと。
- ③ 山脇家の医塾「桃花坊精舎」の学寮を建設。
- ④ 恩師の四世道三今大路親俊を教導。
- ⑤ 「医門の領袖にして仕途の船筏。」当時の医学界に隠然たる勢力を張り、門人の官界への就職も斡旋する師の姿を伝えている。

⑥ 官位を受けた門人の数。「法印二人、法眼二人、法橋十人、禄仕者十六人。」玄心は慶安元年より毎年数名宛の弟子を入門させ始めたが、門人録が今に伝わらない為、門人に関する正確な情報は貴重である。

⑦ 碑文の担当者。「撰文は木下順庵。書は黄蘗山元真、石工は大森氏。」師の易簣直後に碑文の担当メンバーが既に決められていた事が知られる。しかし周知の如く、

実際に建碑がなされたのは没後百年目の安永六年（一七七七）十二月のことであった。

後者の「養寿院弟子小伝」は山脇玄心の門人伝である。従来、山脇家の二代目以降の門人帳は武田科学振興財団杏雨書屋に伝えられており、全て翻刻がなされている。ところが初代玄心の門人帳は今の処発見されていない。従って本小伝はその欠を埋めることの出来る資料として極めて貴重である。先師の易簣直後より書き始められたが、四年後に撰者の前田道通も死去した為、未定稿のまま今に至っている。それで本小伝には比較的初期に入門した五十九名（撰者の前田道通を含めれば六十名）分しか収録されておらず、六百余名を数えたと伝えられる門人の全容を解明出来ない限界はあるものの、法印二名、法眼二名、法橋十三名、録仕者十七名が含まれており、ほぼ玄心の初期の高弟は収録されているものと考えられる。又、二世目以降の門人帳と比較して、各門人のより詳細な履歴を知りうる点に最大の特長がある。慶安元年より同四年まで数名宛の入門者があり、以後毎年一〜二名宛入門している。出身国別の内訳は山城国の十七名を筆頭

に、大和国六名、伊勢国五名、丹波国・伊賀国・筑前国各三名、近江国・紀伊国・加賀国・越後国各二名、和泉国・美濃国・尾張国・備前国・安芸国・出雲国・信濃国・越中国・薩摩国・関東各一名、不明五名で、身分は医師の子弟、禄仕者、僧門、神官、商人、職人等多様である。その後、門人の中から官位を得て典医となり天皇の御脈を診る者、禄仕して高禄を食む者、開業し成功する者等が多く輩出した。しかし一方で、女色に溺れて破門される者、癡狂する者、開業したもの振わない者、才能を生かすことなく早世する者等も少なからず居り、人の世の万華鏡の観がある。撰者の前田道通は、弟子小伝を体のいい「成功者物語」に終始させることなく、敗者の極めて厳しい実人生も憚ることなく記録した。その筆鋒は峻厳かつ辛辣である。生涯で五万人以上の患者を診察し続けた道通は、医学者としての観察力と合理精神をもって、各門人の実人生までも診察するに及んだのである。

（三重県立四日市北高等学校）